

第5章 まとめ骨子（案）

(1) ICT を活用した離島における高校教育について

①離島における課題、必要性

○離島における教育環境等に関する課題

○離島における地理的・経済的に不利な状況の解消に向けた取組

- ・地理的、経済的な要因による教育の格差があってはならないと考えており、生徒だけではなく、保護者も含めて心理的、経済的負担を減らす必要がある。離島児童生徒支援センターなどにより離島出身の児童、生徒の支援を実施。(沖縄県)

○離島に高校が設置されている意義

- ・島の中学生が高校卒業するまで島で生活をするということは、保護者にとっての経済的な面や生徒の精神的な面で非常にプラスになっている。(久米島高校)
- ・子供たちが高校卒業するまでは島で育てたいという島の人の思いが、高校存続に向けた運動や離島留学生受入れにつながった。(久米島高校)

○離島振興の観点

②離島における高校教育の検討に関する論点、視点（地域のニーズを踏まえ整理が必要な事項）

ア 設置者や設置自治体

○ 設置主体や設置場所の検討

- ・本校を設置する場所、離島間の移動手段の検討が必要（佐藤学園）
- ・離島で学びたい子供には通信制の利用が考えられる一方で、一定程度の規模となるよう生徒数を確保することが厳しいこと、教員を一定数配置しなければならないことを考えると、基本的には ICT を活用した新たな高校（分校を含む）の設置は厳しい。(沖縄県)

○ 規模、費用との関係

- ・必要な人件費を考えると、数十名程度の生徒が必要ではないか（佐藤学園）
- ・既存のサテライト校の枠組みそのままだと学費等が地域のニーズと合致できないのではないかと。(角川ドワンゴ学園)

○ 地元における検討

- ・離島留学の受入れ人数などは、町と高校とで協力しながら検討。(久米島高校)
- ・園芸科の廃科に関して、島の基幹産業が農業であり、園芸科がなくなることは大変ということで島が一つになるような運動が起きた。(久米島高校)
- ・沖縄県として高校教育の方針を定めることが必要。(琉大)
- ・積極的に地元からの要望があり、その上で、さらに一緒にやるためのサポート体制について検討が必要。(琉大)

○ 地元と設置主体との連携の枠組みの検討

- ・公営塾のような取組として、地域と連携してオンラインでのクラブ活動や共同学習などの取組も考えられる。(角川ドワンゴ学園)

- ・オンラインでも社会技能を身につけられるような教育を行えるような取組を離島や中山間地域など、類似の課題を有する地域と角川ドワンゴ学園が協働できることを願う（角川ドワンゴ学園）

イ 対象とする生徒

- 離島の子供や県外からの受入れ
- 子供の特性に応じた教育
 - ・離島の子供のみとするのか、離島の子供以外も対象にするのか（佐藤学園）
 - ・離島の子供であっても状況は異なることへの対応が可能か（佐藤学園）
 - ・離島留学生は全国から受け入れている。様々な地域の子供がいることで島の子供も刺激を受けている。（久米島高校）
 - ・島の外に進学する生徒は、実業高校への進学と部活動が主な理由（久米島高校）

ウ 目指すべき教育や手法

- 通信制の良い点、課題
 - ・通信制は全日制と比べてやりたいことに時間がとれる（つくば開成）
 - ・（通信制であっても）居場所や社会性という面から通学したいというニーズが多い。（つくば開成）
- 重点的に考えていく教育内容、そのための体制
 - ・つくば開成高校では、語学力を身につけること、大学進学率を上げることに重点をおいて教育を実施。（つくば開成学園）
 - ・協力校では、5教科の教員が授業を行える体制が確保されており、（新たに設置する場合に）同様の体制を確保できるのかは検討が必要。（泊高校）
- 教育における生徒数の規模の意義
 - ・島に子供が1人しかいない場合の支え方、教員の配置なども検討する必要がある。（琉大）
 - ・高校は社会に出る前の最後の機会であり、集団での教育の中で、他者との関わりを体験できるよう、ある程度の規模が必要。（沖縄県）

エ ICTを活用した場合の教育の在り方

- ICTを活用した教育の発展性、良い点
 - ・ICTを活用した授業形態となっていくことは今後の方向性として間違いない。学びの保証の観点からも遠隔授業は必要（泊高校）
 - ・通学困難な生徒がオンラインだからこそ授業を受けてくれる面もある（泊高校）
 - ・オンラインの方が積極的に参加できる生徒もいる。（佐藤学園）
- ICTを活用した教育における課題
 - ・（ICTの授業では）卒業資格はとれたとしても、対面の授業でないと学力そのものを伸ばすのは難しい（つくば開成）
- 学校教育における他者との交流・社会活動面の関わり的重要性とICTとの関係

- ・高校は社会へ出るまえのステップであり、他者とのかかわりを学ぶ必要があり、対面での交流が大事（佐藤学園）
- ・学校教育のよりどころ、魅力的なところは、生徒同士の交流や生徒と教師との人格的な関わり。（泊高校）
- ・学校へ通学している場合と同様に、オンライン上で友達ができ、オンライン上での協働学習や活動を通して卒業後も社会で活動できるためのスキルを身につけることができるか、という点は課題と考えている。（角川ドワンゴ学園）
- ・ICTを活用した学習もあるが、対面での学習、対面でのつながりを作って行くことは重要であり、通信制高校でもスクーリングの機会を設けている（沖縄県）

○ICTを活用するに当たっての環境面での課題

- ・地域によっては通信環境が悪く、通信環境の整備が課題（久米島高校）
- ・協力校との動画配信について実験的に実施してみたが、教員の負担が過重となり、継続が難しかった。（泊高校）

③ 今後の検討の進め方

(2) ICTも活用した離島における教育環境改善について

○ICTを活用した効果的な授業の実施、そのための研修

○子供がICTを適切に活用するための教育、そのための研修

○ICTを活用して行う研修をより効果的に実施するための手法

○複式学級等におけるICTの活用

- ・ICTを活用した教育の手法や教員のつながり、研修等に関する研究や実施方法については、琉大も協力したい（琉大）
- ・コロナの状況もあり、教員の研修の担保が課題。オンラインでの研修の機会を確保できるような体制が必要。特に、離島教員はコロナの状況下に限らず、研修に参加できる機会の確保は必要。（沖縄県）
- ・離島における複式学習等の実施にもICTの活用は有効。（沖縄県）

終わりに

- ・新型コロナウイルスによって受けた影響
- ・子供たちが教育を受けられるようにするための取組の必要性